慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	幼児のライム意識と仮名文字読み習得の関連
Sub Title	
Author	垣花, 真一郎(Kakihana, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.54 (2002.) ,p.67- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成13年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000054-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

御柱祭における『ふるまい』を事例として―」『日本民俗学』228: 69-99.
織田竜也, 2002a,「政治経済への民族誌学的接近」『哲学』107: 105-30.
織田竜也, 2002b,「ポランニー経済人類学再考―統合形態概念のポジション―」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』53.
POLANYI, Karl 1977 [1980] *The Livelihood of Man*. Academic Press.(『人間の経済 I・II』玉野井芳郎・栗本慎一郎ほか訳: 岩波書店)

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

幼児のライム意識と仮名文字読み習得の関連

垣　花　真　一　郎*

目的

研究されている多くの言語において，音節の下位単位であるライムに対する音韻意識の発達が読みの習得を予測することが明らかとなっている (Goswami, 1999)。ライムとは，音節の母音と後半の子音（尾子音）を合わせた音韻単位である。例えば，/print/ という音節においては，ライムは /int/ である。音節の中にライムが含まれるということを自覚する能力がライムの音韻意識，あるいはライム意識と呼ばれる。このライム意識の発達が読みの習得と関わっていると考えられているのである。これまで，この分野の研究の多くは，アルファベット言語圏，特に英語圏での研究が盛んであったが，近年ではアルファベット言語圏だけでなく，中国語のような形態－音節文字体系を持つ言語圏においてもライムの音韻意識の読み習得との関わりが指摘されている (Ho & Bryant, 1997)。

しかし，日本語においては，モーラというライムとは異なる音節の下位単位に関する音韻意識の発達が読みの習得と関わりがあることが知られている（天野，1986)。モーラとは，CV（C＝子音，V＝母音）を基本とし，これに CCV（二番目の子音は流音 [j] に限られる)，単独の母音 (V)，音節の尾子音の位置にある鼻音（N: 撥音)，長音 (CVV 音節における後半の V)，それに促音 (Q) を加えたものである。日本語の書記体系である平仮名の一字一字は，モーラに対応し，そのため平仮名の読み習得にはモーラの音韻意識の発達が重要だと考えられているのである。一方，平仮名の習得とライムの音韻意識との関わりに関しては，拗音文字の習得との関係が指摘されているのを除けば（遠藤，1991)，研究はほとんど行われていない。しかし，中国語での知見は，ライムの音韻意識の発達が書記体系の形態を問わず，読み習得の前提条件となる可能性を示しているとも考えることができる。本研究は，ライム，モーラそれぞれに対する幼児の音韻意識の発達が平仮名の読みの習得とどのように関わっているかを調査し，読み習得過程に関わる音韻意識に書記体系固有性が見られるかという問題を検証することを目的とするものである。具体的には，ライム意識課題，モーラ意識課題，平仮名読み課題の 3 課題を平仮名習得の初期段階に相当する幼稚園児に対し実施し，その 3 者がどのような関係にあるかを検証する。

方法

被験児

東京都の私立保育園の年中クラス，年長クラスの児童 25 人（女児 12 名，男児 13 名)。月齢の平均は，68 ヶ月（レンジ 58 ヶ月～79 ヶ月)。

手続き

モーラ意識課題，ライム意識課題，平仮名読み能力検査をそれぞれの課題を一回ずつ，計 3 回に分けて，被験児ごとに個別に実施した。はじめに 2 種の音韻課題を行い，被験児のうち半分はモーラ課題を先に行い，もう半分はライム課題を先に行った。各課題の所要時間は 20 分前後であった。それぞれの課題の詳細は以下の通りである。

モーラ分解課題

Inagaki, Hatano, & Otaka (2000) のモーラ分解課題に準じた課題を行った。この課題は，絵カードで提示された語をモーラに区切って発音させながら，紙の上に書

かれた丸の上をウサギの人形を跳ばさせるものである。練習試行では実験者がやり方をカエルの人形を使って提示し，被験児が誤ったときに訂正した。練習試行における教示は，以下のように行った。「今日は，言葉のお遊びをします。このお遊びは，この絵の言葉と同じだけ丸の上を跳べるんだよ。じゃあ，お兄さんのカエルさんがやってみるね。か，に」（カニの絵をみせながら，丸を2つ進ませる）。同様にして，練習試行4問（通常音節，促音，撥音，長音各1問ずつ）を行い，続けて本試行を15問（通常音節3問，促音，撥音，長音各4問ずつ）行った。本試行においては実験者によるフィードバックは与えなかった。各設問について正しくモーラ単位に分節して発音し，人形を跳ばすことが出来た場合には1点，それ以外の解答をした場合には0点とした。満点は15点である。

ライム課題

Word-Spottingと呼ばれる音韻課題の一種を用いた。これは，提示された単語に指定した語が含まれているかどうかを判断させる課題である。ここでは，ライムの位置に含まれるエンちゃん，アンちゃんという人形の名前が，どの単語に隠れているかを判断させる課題となっている。練習試行における提示方法は以下のようにした。

「今日はね，言葉のお遊びをします。＊＊ちゃんプーさんって知ってるかな？（くまのプーさんの人形を提示）プーさんはね，自分の名前がいろんなものの名前の中にかくれているのに気付いたんだよ。今から見せるもののうち，どれの中に隠れているかわかるかな？」

練習試行1：「プール」「ぶらんこ」「いちご」（絵カードを提示）

「そうだね。プールだね。これはね，プーさんの友達のエンちゃんっていう子だよ。（エンちゃんという女の子の人形を提示）エンちゃんもね，プーさんみたいにいろんな物の名前に自分の名前が隠れてないかな，って探してみたんだよ。＊＊ちゃん，エンちゃんと一緒に探してあげられるかな？今から見せるもの名前の中にエンって音が隠れているよ。」

練習試行2：「えんぴつ」「あひる」「てぶくろ」

「そうだね。えんぴつだよね。今はね，名前の前の音にかくれていたね。今度はね，後ろの方に隠れているよ。また見つけられるかな？」

練習試行3：「ふうせん」「つみき」「おにぎり」

「そうだね。ふうせんだね。じゃあ，もうひとつやってみようか。」以下，同様の練習試行を1問行い，続けてエンちゃんを探す本試行を5問行った。練習試行では実験者による正答のフィードバックを行い，本試行ではフィードバックは行われなかった。エンちゃんの課題が5試行終了した後に，アンちゃんという別の名前の人形を提示し，エンちゃん課題における練習試行3と同様の練習試行を1問行い，続けてアンちゃんを探す本試行5問を行った。試行の順番はエンちゃんの課題内，アンちゃんの課題内で被験児ごとにランダマイズした。正答を正しく選べた場合は1点，それ以外の解答をした場合は0点とした。満点は10点である。

平仮名読み課題

平仮名71字（清音46文字，濁音・半濁音25文字）の読みと，拗音6問，また単語読み課題，促音4問，長音4問，撥音4問を行った。国立国語研究所(1972)に従い，71字の単独のひらがな読み課題において，清音46文字中，40字以上読めた被験児のみ単語読み課題を行った。単独文字読みについては1字ごとに1点とした。単語読み課題の採点方法は，第1試行で，続けて完全に読めた場合は3点，1字ずつ拾い読みができ，そのあとで1語として続けて読めた場合には，2点，拾い読みができるが続けて言えない場合1点，全く読めない場合は，0点とした。拗音及び促音の単語読み関しては，第1試行で，正しく読めた場合は2点，最初「ち，や」，「き，つ，て」のように読み，そのあと正しく読めた場合は1点，誤った読み方をした場合，あるいは全く読めない場合は0点とした。平仮名読み課題の満点は115点である。

結果

モーラ課題を通常音節，長音，撥音，促音別に分析した。平均値は，それぞれ通常音節2.92 (s.d.＝.28)，長音3.40 (s.d.＝.96)，撥音3.92 (s.d.＝.40)，促音1.96 (s.d.＝1.65)であった。満点は，通常音節は3点，それ以外は4点であるから，促音以外はほとんどの子どもが満点に近い点数を取っているということを意味する。ライム課題の平均得点は5.52点 (s.d.＝1.92)であった。この結果は，チャンスレベルを有意に上回っていた ($t(24)=5.71$, $p<0.01$)。

平仮名読み課題平均得点は72.52点 (s.d.＝36.40)であった。平仮名読み課題の得点と各音韻意識課題の相関関係を分析した結果，以下のような結果となった。ライム課題と平仮名読み能力検査の得点の間に統計的に有意な弱い相関が検出された ($r=.40$, $p<.05$)。モーラ分節課

題は，被験児の成績が一様に高かったため，他の課題との関係を分析するに至らなかった。

考察

本研究におけるライム課題の結果は，日本語話者の幼児においても，ライム意識が発達するということを示唆している。またライム課題と読み課題の相関関係は，ライム意識の発達が平仮名の読みの習得においても何らかの役割を果たしている可能性を示している。しかし，この結果は必ずしもライム意識の発達が平仮名の読みの習得に因果的に関わっているということを示しているものではない。単に，ライム意識の発達と平仮名の読みの習得が同時期に進行することを示している可能性は十分に考えられる。やはり，モーラ意識の課題の成績を統制した上でもなお，ライム意識の課題の成績と平仮名の読みとの関係が検出されるかを検証する必要がある。しかし，本研究においてはモーラ課題の成績が高すぎたため，モーラ意識の発達を考慮した分析は行われていない。今後，より敏感に被験児のモーラ意識を測定する課題の作成が必要である。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程

参考文献

天野　清 (1986) 子どものかな文字の習得過程　東京：秋山書店

遠藤めぐみ (1991) 日本人幼児の韻の感受性と拗音節表記法の習得．教育心理学研究，39, 448–454.

Goswami, U. (1999). Phonological awareness and orthographic representation. In M. Harris & G. Hatano (Ed.) *Learning to read and write: A Cross-Linguistic Perspective.* (pp. 134–156). Cambridge: Cambridge University Press.

Ho, C. S.-H. & Bryant, P. (1997). Development of phonological awareness of Chinese children in Hong Kongs. *Journal of Psycholinguistic Research*, 26, 109–126.

Inagaki, K., Hatano, G. & Otake, T. (2000). The effect of kana literacy acquisition on the speech segmentation unit used by Japanese young children. *Journal of experimental child psychology* 75, 70–91.

国立国語研究所 (1972) 幼児の読み書き能力　東京書籍

条件性場所選好を用いたプラナリア (*Dugesia japonica*) におけるモルヒネの強化効果

草　山　太　一*

目的

プラナリアとは無脊椎動物・扁形動物門・渦虫綱の総称であり，系統発生的に最初に脳を有する生物と考えられている (Sarnat & Netsky, 1985)。このことから，プラナリアを対象に精神依存性薬物の強化効果を検討することは，社会的に問題視されている薬物乱用の進化的な起源を探る上で重要であるといえる。Kusayama & Watanabe (2000) はドーパミン作用薬としてメタンフェタミンを用いた条件性場所選好試験を行い，プラナリアにおいてもメタンフェタミンの強化効果が認められたことを示した。オピオイド受容体に作用し鎮痛薬として知られるモルヒネは，自己投与や条件性場所選好の手続きより，サル (Deneau, Yanagita & Seevers, 1969) やラット (Werner, Smith & Davis, 1976; Mucha & Iversen, 1984) においても強化効果を持つことが示されている。そこで，本実験ではプラナリアについてもモルヒネによる強化効果が認められるかどうか検討する。

方法

被験体：プラナリアの中でも，ナミウズムシ (*Dugesia japonica*) 42 匹を用いた。ナミウズムシは 14～18℃の冷暗所内で，水道水を 2～3 日放置した汲み置き水を用いて飼育された。毎週 1 回の割合で赤色ユスリカの幼虫を与えたが，少なくとも実験開始 3 日間前からは給餌しなかった。

装置：直径 9.5 cm のシャーレを 4 分割し，その底面に汲み置き水に浸したろ紙 (Whatman, #1) と薬包紙（東京日本油紙，白パラピン中型）を交互に敷き詰めて，選好テストの観察区域を設定した。条件づけには別に用意した仕切り板の入ったシャーレを用いた。これによって条件づけ用のシャーレでは，被験体が自由に移動できる場所は 4 分の 1 区画に制限された。被験体の動きは，